

心を満たす食べ物を届ける

今のままでいいのか？本当は何がしたいのだろう？この疑問に、毎日もがき続けた立花貴さんは、東日本大震災後、目の前の人たちのために、ただひたすら動き続けるという経験をした結果、自分の心が本当に求めているものに気付くことができた。

10万食の炊き出しを行った中野中学校出身の立花さんに、活動を振り返ってのお話を聞いた。



立花さんたちのメンバーが行った温かいハンバーグの炊き出し

1 3.11 あの日東京では

突然、電車が緊急停止。大きな揺れを感じると同時に、車内に悲鳴がこだましました。ツイッターのタイムラインがものすごいスピードで流れ、皆のツイートからどうやら震源地は宮城県沖のようだと分かりました。「やっぱり来たか…。」突然、あの時の自身の光景がフラッシュバックして、不安に襲われました。小学校3年生のときに、宮城県沖地震を経験した、そのときの怖さが蘇ったのです。

仙台にいる母と妹に連絡をとろうとしましたが、つながりません。地震はある程度覚悟していましたが、平野を襲う津波は考えもしませんでした。「一刻も早く仙台に行かなければ。」そう心で決めました。しかし、その日は東京も帰宅困難者たちで混乱していたのです。

2 目にした仙台の光景

「仙台はどうなっているのか、二人は無事なのか……。」実際に見て確認したいと強く思いました。仙台の中心部は、さほど被害があるようには見えませんでした。国道45号線を多賀城方面に向かい、七北田川を越えた辺りから風景が一変しました。2階建ての家が川の真ん中まで流され、沿岸部には真っ黒な泥が辺り一面を覆い尽くしていました。まったく信じられない光景でした。

母と妹は指定避難所ではなく、福祉センターに居ました。そこは、指定避難所からあふれ出た人たちを収容していた所でした。他の避難所を巡ってみると、食事も取れないところがありました。その時の人々の姿がしばらく頭から離れず、「この状況をなんとかしなくてはいけない」と思いました。炊き出しの支援を始めたのは、その一心からだけでした。

しかし、支援に動き出したのは私だけではありませんでした。

こんな大変な状況の中で、仙台在住のパキスタンのボランティアの方々が1,000人分の

カレーを作っていました。近所のコンビニでは、停電の真っ暗な店内でトイレを貸し出したり、水を提供したりしていました。避難所では、家を流されたり母親を亡くしたりした中学生を含む十数名が、元気に明るく一生懸命に避難所の仕事をしていました。どれも私には、ぐっとくる姿でした。

3 温かくておいしいものを

被災地に着いても、どこに行くというあてがあったわけではありません。大規模半壊の実家に泊まりながら、毎日あちこちの避難所を回りました。自分にできることは何か、その場で考えながら無我夢中で動いていました。

過酷な状況になったとき、お腹が温まる食事をするとなんとなく力が出てくるのを、自分自身も体験していました。それならば、「少しでも元気が出るよう、温かくておいしいものを食べてもらいたい。」その一心で、食事の差し入れや炊き出しのために走り回っていました。

2011年4～5月支援活動スケジュールから
<炊き出し>

4月30日	石巻北上	焼肉 3,500名分
5月1日	石巻湊	昼食 500食
5月2日	石巻牡鹿	昼食 500食
5月3日	石巻雄勝	昼食 500食
5月4日	気仙沼小泉	昼食 230食
5月14日	仙台高砂	昼食 200食
5月15日	石巻鮎川	昼食 250食

<配送・配給>

4月中旬～	学校給食おかず配送	平日毎日 70食
5月12日～	弁当配給	平日毎日 530食

4 役に立ちたい

社会貢献をしたいけれど何をしたらいいかわからない人には、「まず自分の目でしっかり見て」と話しています。エネルギーのかけらみたいなものが自分の中に残るはずです。そしてどんなに小さなことでもいいから動き出してみることです。

もう一つ大切なのは、社会貢献する前に、自分のことはもちろん家族や自分の周りにいる人を大切にすること。身近な人を幸せにできない人が、遠くの人に何かできるはずがありません。社会貢献をしたいと思うなら、大切な人を守り、個人としてきちんと自立しているということ、社会で働いて役に立っていることが基本だと思います。



写真撮影：市川勝弘

たちばな たかし
立花 貴

東日本大震災における被災地の子どもたちを笑顔にする支援活動を行うため、公営社団法人『sweet treat 311』を設立。現在は、宮城県石巻市雄勝町を中心に活動し、子どもたちが体験を通して、感じて学ぶことができる場を創造している。

また、地域の方が主役となって運営する地域の再生を目指す取り組みも行って。平成27年夏には複合体験施設モリウミアスを開設し、地域の方や全国の支援者、様々な企業と共に、子どもたちの未来のための支援活動を展開している。